
しょうろう橋

一之瀬染子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しよろろ橋

【Nコード】

N14660

【作者名】

一之瀬染子

【あらすじ】

第11回バトル仮面舞踏会投稿作品。

お題「橋の上」

花火大会に向かう途中、いつも通る橋の上で出会ったのは白っぽい着物の女の人だった。

浴衣なんて着るんじゃないかった。

めつたにしない着付けで時間は食うし、補正のために腰に巻いたタオルのせいで息苦しいし、全然涼しくない。おまけに慣れない下駄のおかげで家を出て五分もしないうちに鼻緒ずれ。

携帯を開けば待ち合わせの時間までほとんど間がない。肝心の花火大会にはまだ余裕があるけれど、なるべくいい場所を探そうと思つたら早く行かなくちゃ。

気は進まないけど背に腹は代えられない。一瞬ためらってから裸足になる。地面の温もりの不快感よりも下駄から解放されたことにほつとした。下駄を手に提げて足早に道路を進む。夕方ということもあつて裸足でも人目をそんなに気にしなくていいし、道路が歩行者天国だから車に注意することもないし楽でいい。

ちよつと遅れるかなあ。

心配になつてきたから一応伝えておこうとメール画面を開く。短く本文を打ちこんで送信ボタンを押した途端にぐい、と腕を引かれた。

「あなた、なんでこんなところにいるんだい？」

女の人の声だった。

携帯画面を見ていたために暗さに慣れない目でそちらを見ると、人影があつた。女性だと思う。白っぽい着物を着ていて、それだけがぼんやりと浮かんでるように見えた。

「なんでって……花火を見に行くんですけど」

いきなりなんなんだろう、この人。目の前の女性はあたしの腕を掴んだまま困惑したように、

「そういう意味じゃなくて、今日は通っちゃいけない道だのになんでこつちに来たんだい」

言われる意味が分からなくて言葉が出てこないあたしを見かねて

か、彼女は周りを気にするように声を落した。

たもと近くまで来たところで彼女はやっとあたしの腕を解放してくれた。

何となく来た道を振り返ってみる。別に取り立てて変わったところのないように見えるその先が彼岸とつながっているなんて嘘みただ。

「次からは気をつけるんだよ。花火、楽しんでおいで」

ありがとうとあたしがいうより先にそう言って、あたしの背を突き飛ばす。たたらを踏んで振り返った瞬間、ドンと身体に響く音。

夜空に咲いた金色の花に一時視線を奪われる。すぐに橋に視線を戻すけれど、彼女の姿はどこにも見当たらなかった。

たもと近くまで来たところで彼女はやっとあたしの腕を解放してくれた。

何となく来た道を振り返ってみる。別に取り立てて変わったところのないように見えるその先が彼岸とつながっているなんて嘘みただ。

「次からは気をつけるんだよ。花火、楽しんでおいで」

ありがとうとあたしがいうより先にそう言って、あたしの背を突き飛ばす。たたらを踏んで振り返った瞬間、ドンと身体に響く音。

夜空に咲いた金色の花に一時視線を奪われる。すぐに橋に視線を戻すけれど、彼女の姿はどこにも見当たらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1466o/>

しょうろう橋

2010年10月15日20時29分発行